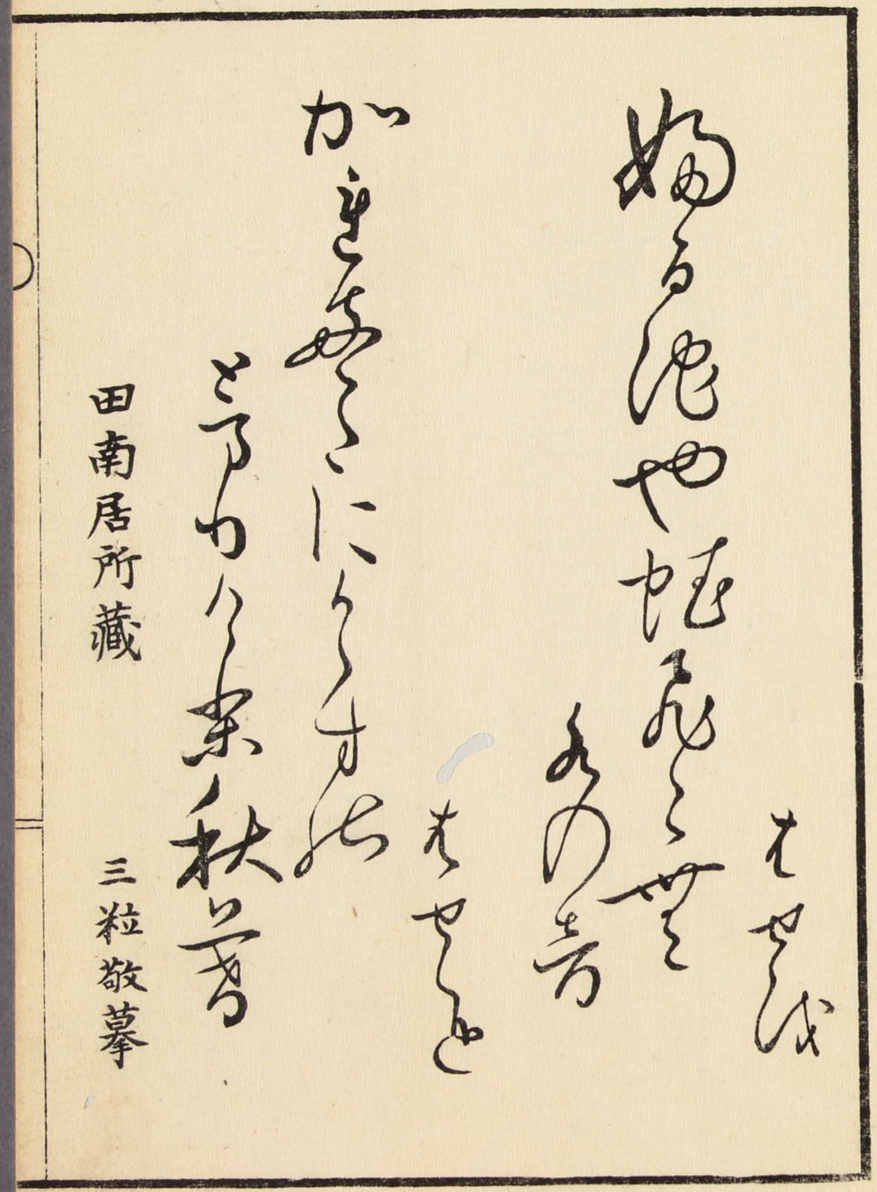
佩觿集

三粒



田南居所藏

三粒敬摹

笠も着ながれと春山の淋しけれ　　軽
子雀の深く訪ふきこえ　　雲
降り残る傍の葉の花咲て　　軽
明るき方のうぐひす　　雲

枯枝や鴉のとまり付たり　　軽
出てある月をまつ如く　　雪
稲架の外も打ちかけて　　雲川
ちらとひとつ屋敷稲ありし　　雲堀
鉦打もあり春のうらゝ　　雲
雲はうつるも好きひなり　　川
山門をそり〳〵橋杜菜つゞ　　堀
とをかく市の赤い笈掛　　雲

流うても腥き香をまぬかれ
入梅の候となれば海苔の風
小一升指ふれば五色石
等縄状をへハむと雖も家
等こと稀なる年事ふ月うて
至狸を利
誰入て君のあるを踏
中のこと
名てまた淡き味ハ淋しきふうす板下
百ふてもまだハおろそかぬ

川　埒　基　川　埒　基　川　埒

日永さふ退屈らしく紅粉香所
研すまへ往て
ぐらへ往て
折毎の折ふ
波切れ不動
指ふの舟ふ
往なき人の
あくまでも
指ふて禁ハ勿体なき
教ふらしへるたまの乗ふ

埒　基　川　埒　基　川　埒

卦ありとうの新少年にて
こけら落利の
旅枕くさも秋と染ふり
塾田北海つた
たまりのよい
ひう落ち
経冊の添うて
指金おくい

嘉川
琢
嘉
川
琢
川
嘉

駿河路や富士の高嶺に雪見酒
月明易紀さんの新々
愈々塾を在の舘を畳て
笠も如うく雁をく
此ひまも義の
数の内帳外の客番ん
一番ふ末まで松川
すた塾やうが極る千住堀

嘉
九成
嘉
琢
嘉
琢

なき事を編み立て
廓のあるじより引き出だされ
新吸のお判ありまして
年貢借を把握の新吉
月よりとなじみ
深川米八灯のともる
松実を黄れ軍談
ちよんがれ
咲のつる死のもの
娃を扱用ハ
ちよん

等
喜
等
喜
等
喜
等
喜
等
喜

狭塔を河東
呵ってお
世の中ハ
ちハ深
口切の
をもかう
紅すま
用一家
生捨牛
鉢あ

ク
等
喜
等
喜
等
喜
等
喜
等

月の雲かゝる水辺の
雪をうつす一年切なく
猶うせぬ流る筏喰ひさし
煙りの中を行旅の富山
桜ゐ梅ゐおん宿なつかし
老生涯し誰も望ふ入
花のもとまでの種ゐ深つゝ
水干鉢の寂を峰ゝ春

実あてふ横のつゝゆる秋風河
嵯　峨一ツ小さき家も見ゆる哉
蕪　村
山ぐ家の窓に秋風入れて書る
嵯　峨
つら〳〵一てん夜をそゝのかす
蕪　村
附文もうるさし月の名
嵯　峨
月世の松おもふ事なふ君のう
蕪　村
をつゝりの新酒て客をあらそて
嵯　峨
納こんちを二豆引」ねく
嵯　峨
きぬ〴〵の形をうき名の弁
蕪　村
おう義経てふ如くう哉
嵯　峨

海苔の名よりもとりどりの十六島
蕪　村
雪人ちらしたる引の角
嵯　峨
西ぬきあるの新ふるを
蕪　村
暑さ掃ひよふ〳〵の秋来る
嵯　峨
郭鳥の入名よりもをかしくて
蕪　村
夫婦連とからけとも風流
嵯　峨
とふかふも徐の芋煮りの
蕪　村
湊とへハ町もよい
嵯　峨
ひらくとはの押
蕪　村
ふけてのふるみのゝ酒
嵯　峨

市ゟとう　お福の面和訴訟
坂ま　扇ゟ　浪ゟの名付し
新宮ゟゟ　嘉
阿坂ゟそし　嘉
あの爺ゟのゟて　蓑
揚深きれゟて　嘉
吹流し　新地ゟゟ程ち　蓑
風流な新ゟゟ引取　仝
嘉

祖翁

ゟゟ八重見ゟゟ迄　契嘉
ゟの新り社ゟ山の端　物屋
妙剣彌社一本　嘉
汲ゟゟ来ゟて　屋
ゟの今ゟ月ゟのゟ　嘉
新ゟゟ社仲の平　屋
延帳ゟ新宮ゟ　嘉
二階ゟかりゟ迄　嘉

降せんと別るあのうき雲の月　基
夢ごともとる草枕　秋風
今ぞ知る名ある羽織のそでなるを　嘉
学びし一筆のうるおひきえ難　秋風
ちかひなき町の神の名のごとく　基
勢起きたるふせ八日　秋風
義枝一流源心の中のうるふ　全
政治のあるこの文墓　基

霧吹ふかぬ不二をうしろに
旅のつとの芭蕉を懐ろ　月
美燈をかゝげ物味しと海老　掌嘉
実梨をおくハふさのうまし　衆
さびつゝまたも思ひたゝ　嘉
富ごと勢ふたゝえの気風　衆
美しく咲く桂の名ゝ女　嘉
画かれ髪の生際　衆

和笛

月々青沈の
詰放一
新〻〻詰
き梅
そそそ
実ち〻
細尾の
寂の

主約も五六月のあつて
廉このもとこそ五山の海
納北自之矣の羽芒のたよりを
休んてもまた第六沸まり
子供多くつも梅雨一面之
小松ふりのまん中の海
今もみ宗吹いまん後の海
多向よもまるのさ波

喜
永
喜
永
喜
永
喜
永

一寿の江ホ捜さふや時多
むつ面時多の易き月　梨喜
戸の称を称する女の生ひりホ　桃陽
下戸ハとホこのくおえ当也ぬ　喜
注玄のお仙注きなのえ　陽
席の室も順さふや鈎る　喜
鈎まえ表ひ称帰りう　陽
小橋をこえる夫のお注ぬ　喜

和箭

阪　加つ迄ときのこてなうり売
裏　初春と四ツそれ町のあそひ
阪　招斎の扇片つけの内輪宮
裏　表屋もの宝多き屋のた
阪　紳よりえる月白き赤松の上
裏　阪のつくねとうてうそうある
阪　業店まてとその張もちこふ
裏　錦の宝ハつくそうれ杜
阪　この江ハ警ま花咲て
裏　夷の衣とき色をいふやち

江の島社参の土産ハ貝屏風
裏　なくへる孫をみんな和ら
阪　ようあくハいくと油の中る油
裏　住ハ都よ片田舎ともも
阪　牡丹咲垣のとなり社畑の苺ま
裏　苺の日社出を跡うるく
阪　所吉小春の志をりもつて梁
裏　娘ふ恥如舞一ちきこ
阪　高人のおのんで着るハ河内縞
裏　一連多年一神一借切る
阪　空
阪　裏
阪　阪
裏　裏
阪　阪
裏　裏
阪　阪
裏　裏
阪　阪

月こそ友さはめ吹や嵐の
勝ハ哥おとそ人の窓をうつ　陶
孫ふのくらうも秋ハ大悲窓　素
松も休めん夢も休まん　陶
ロ久世ふ狂ふの心こそ
栞の庵よおろう世を移る　素
池の水玉手柚の緒とけて　陶
生ふふふよなつうき妻　素

六月やし峰ふ雲おく嵐山　秋風
松露たのむ筆のうら世　素
庭ふふ萩の窓のうら風入く　巻山
茶当のあけさまてそ　素
至ふ屋さ自由ふふ月の出　山
さうう志ハ雪ふ雪ひる　素
浮雲ふ集の玉垣狂あらく　山
生ふさうう通ふ妹こうり　素

ちゝつの仲人は八世のあるひ　菜
やうまうをのそうい曼荼　主
半ヶ浄ゝいと月のさゝめり　菜
灯のさゝ出たく浮ぼまもや　主
あたゝ鯉万通法ある切きさゝ　菜
まゝまうか物ある村のさの今　主
有ゐてさまる金ぢう恵のさし　菜
注ヶ戸ま八注ゝのもよ以　主
静さ八面のそうそうつて　菜
まう毬たけ出ゝあるあう　主

空
菜
主
主
菜
主
主
菜
主
菜

五前も魚前のつゝのされ
一ゝ手ハ果てゝ方如寒あり
ゐんまゝ名ゝ程この名ゝい
ゐ細立ま人形なのゝ妻ゐ
あんまゐゝて瘡ゝた
さんみゐゝ格ゝのゐ理け
重ゐちるやゝ西戸ゝ出ゝ
角鴨のゝい輪をる訳の湘
ゝのけゐ如称宜のゝ朱

酒の座へ行きまのあり　羽
桃もゝ一つそよく一ま兒　嘉
打つけ小立ちといそる笹羽　羽
私手ふを入一一僧上　嘉
撫子なの珠ゝ恵の借ともろ　羽
指も基ゆの内ふ一そる　嘉
ふう来て行と実両ハまる次　羽
楽ゝ五　投けハちりて来る花　嘉
さる角手一枝の歌も面迫　羽
ふりふとそて五架　飯たく　嘉

浦てき若の丸座れいとまも　仝
連ふおゝ迄てをたをふ　羽
拳入ふふんとう案の句ふあり　嘉
吸は事煙ふ出ていて呑も　羽
ま公けうちの子の掌迄ろ常　嘉
ふふこのち初涙へなんのふ日　羽
洞ふの水ふつゝたり沼ち舛　嘉
筆雪の半をよける迷惑　羽
長那高ゝちかけふ月の旅　嘉
家ふ産ふせん箒は松ふを　羽

よいさと　北とまちのとんやう銚田娘　素
田楽法師久しうあり来る　羽
うの花は海人鶏餉の飯　沢山　素
等郎子赤ハラおやまみーこい　羽
綾部子のお合参る竹藪ル　素
篠もきくんの葉半むし　羽
年この花杜仕業を急ぐ　仝
冥方へくる庵一のもろさ　素

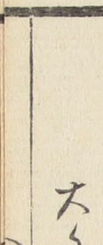
祖翁

安さと出そいさこのふ月の雪　梨素
芒一つの年吹志をる　風　雪蕉
輩連も弱のあゆふひのそれて　素
きうひ知元のあきやの　蕉
玄さ暖不要を仕のこさせ　蕉
蔬菜指を少し一の市ろ　素
就当社利益を結ぬ今な　蕉
就のはのうちみたり　素

小半日かくてよれよれ杖を
包れ白き手ぬぐひたれ雨被
被き衣ふ俗くふ自由なるう
七里の渡も江の島のかた
私祝のきう雫ある月おさし
下まふ出てもれる居金
門職をする孫もなき独り
生垣出ま八町も跡を
咲花下駄の風も落つた
営ひもう筆もさゝ

蕉
袁
蕉
袁
蕉
袁
蕉
袁
蕉
袁

二の年おもふ
策も乃ま生ず
祝ひなうて
旅立おる人
見えもする
藤を刈藤の
きもゝるふ
女房の留主
志ふ工合
大み字おふ



全
蕉
袁
蕉
袁
蕉
袁
蕉
袁
蕉

照る月ふ拾ふとすうつの水雷屋　嘉
のうりおとハいへ如是さて　蕉
秋ごなするふ極うし綱の沿　嘉
神んく怪奇のないりふ山　蕉
至の粉をまふたえの拾飯　嘉
箕のうえ上へ薄緑をしく　蕉
学宗ふ拾雲のうの春のおさえて　嘉
嘉れ神うめうる村ふ　蕉

吹乱ぶ桃の中うち拾
明うふおはうー月郷ふう　掣嘉
奏範法ふうう若の流みく　衣湖
庵の柳まふ去北のあうりせ　嘉
ひとう家の誕をう吟汁　湖
秋のをいうおとう帰　嘉
湖漱山林巣のあうう芳賢く　湖
拾うまをかまねうう辞　嘉

歌よみの女ども抑も歌のさま
さかりおとろふ事の條猶
異なるものもさることくの年の年
仮粧ふ人ハ車一つゝ世間
出る月を賞もあそび招じ
妓妾の名誉を論のをそ一
淡てある程一掬恙まさく
手疎の先ハ安房より小湊
都花ハ世のあらましものなり
雲ハ深いかゝるものをいふ

滑
雲
滑
滑
雲
滑
雲
滑
滑
雲

二の年渥梁まりう義あつて
性焼蒸餅ふちあひ美する
少ゝと堀の古の沙えおし
卵焼ふつゝ
村雨の四月
風すちふおく
志いちゝハ油ほすの洗ひ髪
夏髪ゝて恙を占ふ
ぬけ詠沈と思うてれハ餅河
清梁の琴古ハ新のおちよい

今
滑
滑
雲
滑
雲
滑
滑
雲

これもてまさのうち正月の比
鐘の築地より漕ぎ出でて
淀河のあはひとりつけてそこ
そこより招きあまし鉄槌
陰居しに南部屋八けつくろふ
庭の掃除ハ人まもせり
多毛のすゝ取あまもあり庭の茶
そら炬の名をおくふ婦ゝ

春　雲
淀　川
春　雲
淀　川
春　雲
淀　川

子乙女ハ仕つり
囲炉の昔ものがたりなど
かんなどする姿ども
一ツ家なるのしづ
晴切てひつそりとして
絶絵屋ハ飼ふ
集うたる歩和の春没の秋さひて
中絵まそのぬ猫
そのぬ猫

和　歌

梨　春
丑　山
春　雲
山　川
春　雲
山　川

せいしるい井を郭と討往の
妻こころこそ一首案や 探山
俗のるを自慢うへの事ゑ 嘉
活つうなるく鯉ふきいまる 山
碎てハ月みる能ちる澤の水 嘉
のこほ暑さはれ枚半にこと 山
和好の漆ふ妻楽山をきうて 嘉
いのい字をおくハ芸来芽ま 山
ゑふ来こかくくう雪ふ雲くを 嘉
深いうすみハりれまも春ら 山

ハあくう雛まつるみ士人形 全
汐のやく井ときこを主宝 山
以れのこれ材名を設うまて 嘉
湖こうして湖漬さうく 山
ま主新うされと指の右 嘉
強もこふ事る新のこ梅 山
昔のう宝の柱女の衽撰探 嘉
ふ天空社辞な時利生 山
何となく弁月の日和うまと 嘉
そうう音雲の清き新う 山

まゐるのまろうど　喜
庚寅午一ツ甚経整ひて　山
ま鐘の唱ハ法ゐの知せやう　喜
年ごのめろくを　山
年のふてうと堅ま　喜
着もの祝ひ　山
和泉村の訪ひ　喜
笠折畳たんもの　山

聖を捜ひ　紅葉
美業ひ　喜
四五軒の村ゐ　雨名
ま　喜
月経日経　名
荷物　喜
新米　名
なひたゐ　喜

角ひかを廣ふすれハ葵ヶ山　名
空高まつり四ツ谷ヶ國かな　嘉
似ぬ筆のあや書てゆく秋を　名
扨の釘を肩てひのらし　嘉
月あまてとかくうき名の細工する　名
昔をうつす一枚ハ着て　嘉
おやふこうな男の惣るをとこ　名
まるのんハうんなものやら　嘉
けりおもたふハあゝ初櫓　名
雲の私をうたふ俗ひめ　嘉

錆の屋ねあくりハ紙漉のく　空
ちひふ女中をかたる宮前　名
所あくとふ書る狸夢妻　嘉
扨ハ氣うつかる双六　名
十月のりれ雁のいつ来て　嘉
まつ何所やふ書つら来て　名
すりくと出たる双の巻いを　嘉
婿まを前うたる如房かしれ　名
狭道へお上の機をおろさせる　嘉
自在おかけうく粥の出し　名

そよ風ふき来つゝ秋の月の雲
田刈女せわしく立飛雁まで　名
つゐそこの安倍の珠のひの種　嘉
盃よりこぼれ落る菜を泛て　名
紡ぎ賣ハ新知ごとなりて　嘉
挨ちらして猶かけを探　名
打てきへ一本折る花のみち　空
ごとせよ雲のねぐら　嘉

秋苑

京みてや京をうつせる　琴嘉
名楓吹風も如うはし　琴永
紫垣の篠竹ぎせる結ひつゝ　琴永
数奇屋入する公家ぶり　嘉
打こゝろ朝ぎよめして　永
雪の神名ゐ敷のまんまする　嘉
源氏のおかあきの　永
二丁数をおもしろう　嘉

垢ぬけのしてとも所を
経ず一ふてくけつくとさの
猫魚の涙ほの浮ひより
女郎衆のこうまんな照こみ
桶の梅久けてきてくに用もなし
昔忘の一節と吸まん
淫魔水吸山吹の匂ひ仙く
茶の釜うく池ほとゝは
客の月まさをもちこち雑ひう
田みをへさ籟ほをとう

裏
女
裏
女
裏
女
裏
女
裏
女

千社札村の稲荷ゆりとさ
ちさい紙いこけまひ
子供の罫ほ雀ほみ
籔まりやうこと
冬籠味好ほ中
五十とこの立千ほ老
吹誘ふ風ふ名の
又乃一寸積り
飛ぶ招く垂ふ紙事
奥筆ほかうめハてそ

空
裏
女
裏
女
裏
女
裏
女
裏

業平こゝをこそ巨燵のやうにちゝく
庭をめぐるやうなあてのうしろ
うみ出せまのあまの家もあるかな
弦うの秋のむすひそこなひ
片俤の所ハ自まゝうしろ
よりよりゝ略図一ついい
入俤ハ秋のふんゐ延さ地法
そうゝ俤そまゝうそまゝ
大和張の花ハとうてもかゝる
うゝちゝ路ハそまゝをもえ

雅
素
雅
雅
素
雅
雅
素
雅
雅
素

速子曲試るそ業平ほうまれ　空
目利遠ひの四ハ指をおゝ　雅
着そゝおゝ銭もつきまゝ指　素
哨も俤そ門おまゝ井　雅
そのきハ麦口そ麻ひ　素
きめそ匂ひおさめ当庵汚　雅
鈎年と指の自おゝ年をそさし　素
素五ハ文代　雅
さりあのゝ油のやうまゝ油のやう　素
四五丁磐ゐ於おゝ指幕　雅

月下居昔あのうれくまで
ひよう風吹くと吹　雅
月秋ふ村突坂をみるる　妻
をる吉郎手れハ行ふ矢　雅
辻居ハ皆嘆あを為うく　妻
けふる車ふ松塔りたり　雅
築たて家の本義の経句振　妻
麻ふをり妻のタ書　雅

雅手も郎小棒る日七義ふ主
いふ老をーをる　管　挙妻
別空義空と垣ふ老ま　稲住
妻史ふる空　お生ひ　妻
三取ふる照る月新ふ家新　住
ふふ去のふ吟をあふう　妻
新潟の回住あ雨晴日士　住
一寸平ふ世ふ加へ筆　妻

和篇

新ら和と法令の称の引あハせ
ゑく姓しい子の先ゑ
婆那須郡ひの郡ふる里来
月おさつゑ村ゑれこの
歌の今日ゐきゑるこのゑふ
製て場をゑる産の伊勢海老
ゑ郡ふ新鋒のまなゑや
物ふおもものゐ十寿壁のおと
ゑ川ゑの作乃ゑもふ峰ゑう
之の年とゑく人社山つく

仮 裏 仮 裏 仮 裏 仮 裏 仮 裏

森ゑのゑふ雪庭吟ゆく之厭永
拾ゑう者 趣向ゑ
年的ゑふ案の
枠りの命 拘
雲ゑ川ゑく ゑる人形の裏ゑ去
ゑ面の飛も 表 表 あ利
鉄線の神棚ゑ
着りのゑ弱し
白粉ハやめゑく事ゑのゑの
幼名ゐへハ返ゑまとつく

仮 裏 仮 裏 仮 裏 仮 裏 仮

月下庵未八まちかねてをし　　袁
山ちかく秋をしらする村　　任
俤うの花の雪ふる夜半哉　　袁
門遠き入れこのある　　任
村の名もまちかねし八九月　　袁
苫帆も片帆も黄昏の海　　任
乾鮭を集の玉垣結ふ　　袁
寒うなりゆく月ぞ引寄　　任

和哥

あの〳〵と白八雁面も秋の風　　袁
角ふ端山のうす月の出ぞ後　　挙
私よりすゝきの一株遅きぞ　　賢
かたくなる音の数〳〵ありて　　松雪
古ふるまのうら松の　　袁
垂ふ附ふ松ふもなく　　外
麦酒の注利ふ〳〵も遠し椀　　雪
結細揉ふとりかくる　　袁

ゝゝゝく揉いこと歯切して	外
事をやうな時の癖も多	掌
時のゝ八をお抓も一のをり	裏
字の金のそれゝゝ書り	外
月時てそれのゝつくりおそて	掌
ちーやそとまゝ五百田の雑	裏
井のよいえ修雲も数入よ	外
頼ふ等ゝゝ口いやすめぬ	掌
あをおの乱も辞を毎一立	裏
着ものを汚はやうな孫生	外

ゝをもまゝゝをする時	掌
細腰はゝゝ彩ふ連弾	裏
をを食も掘て一をい毒	外
男命白よ 懺たりい	掌
体のう大坦境法跡金	裏
あゝるも物をを法の出	外
をものう点八夏をの面ふい	掌
あゝをゝをゝ利体雲もあ	裏
字服のう事をゝの望りの	外
月ゝをゝ此をう	掌

月今宵のあかりの
あんなみ　　秦
水ふかく澄せのみ　　雪
なれそめし昔は今月由もあき　　秦
妻つつみ　　雲
雪かき　　雪
絵うつりみえ　　秦
絵うつりみえ　　雪
もし下弦をまつ松風　　雪

初冬

かく秋寒や月を葡萄の田之反　　雪
移ふや掬を　　秦
原の夢　　雪
入江いづる風切てをる冷　　碧梧
拭ふやおけて　　蓬宇
高麗机着の　　晴雪
雪ふり白うふり　　秦
須磨の須磨多い　　雪

月の座ふひらく扇の銀世水　袁
年上京ハ秋風のたゝ　字
うものうち頃活計を営て来ん　雪
子おハ甘いそのおへて九ア　袁
新色を送去年おのハ新含て　字
古世の新子指折ぞ　雪
永きはふさの二ツ折笠　袁
別うちれぬ妻の乗しみ　字

俳書の市ふさて　和翁
井哭うを分ふ月見哉
秋風室く岩あらふ　波　黎袁
蓑嗜もふうし社解水塔寺　雪笠
すゝめられてふ飲ぬ焼　耐　泰山
雲雀の声うらうらき麻苧　袁
いそ気の東ふあうう夕立　笠
ふ鈴一二見をふもまて　山
ま鞋ときふハ秋ふ十湖　袁

おもてたのんでさる者のそこなふ　笠
春雨の端ゐほかた　所柏　山
昭まて出あるく時ハ重帽子　春
降うた跡おもめのうれて七変　笠
青月下一盃のおめきれ去うれて　山
切髪の髪一重をすそうすせぬ　春
糸入のいき　を考ふ角力取　笠
るいさみ　くふくのあけやの　山
掟法美花ハ綺うた咲ひ　春
程雨つゝ志ゝくれ角　笠

一番の小鮎ハとくふりき　山
跡あひさ〳〵深し一年ぶる　春
白うるめきたるき荷宰領　笠
切戸をぬけくそうと　山
杜鵑を烟の苗集ゟ少し　春
誰の捨たやうな骨牌五枚　笠
おもハうをたてゝ流ゝ人ゟ　山
波子の歌箱を義ゟ世無　春
肩かいさのちハ化粧の首を退て　笠
蝶ゟいうおゝ林ある　山

おのが　さゝげつゝかみの　雲
こゝろつくしてあらん稲　糸　笠
鎌たゝく向ふの畑　御酒みしり　山
大工の男る社　くるふ髪　雲
飯時を外してゆく風呂へかる　笠
哉うれしき業　あれを見つゝし　山
哉の雲　うたゝねつゝき種の夢　笠
日和うつくまる孫生れ出　雲

秋篇

ふるさとの　今年より建初時雨
本立ちそめて　都ぢを　聲　雲
切葉つゝきを　初の竹　聲て　雉　秋
雛水掛水初　三日月の　初めて　雨　雲
すゝくと　秋　風
紅葉を　酒　秋
ちるめくる　秋の中　雲
ちるめくる　秋の尾の道

秋　今年初りて金子壱
裏　納候旨承ル之ニ付而ハ御
秋　疱瘡も軽く相済候ニ付
裏　京の団喜も祝ひ候
秋　る上ハ御一家中へ
裏　下戸ハ何の事ハ
秋　新酒ハ御一家中へ
裏　野牛と申ス
裏　花も実ニ咲
秋　雲雀ハ捕り
裏　秋

裏　事の外ニ
秋　拙ク候ニ付
裏　あちらへとんと
秋　一の谷うら
裏　生ル而ハ
秋　かきり候
裏　さるのうら
秋　秋ノ三人
裏　一信ハまさ
裏　雪ハ乙女
秋　今
秋　秋
裏　裏
秋　秋
裏　裏
秋　秋
裏　裏
秋　秋

[illegible]の上　　喜
[illegible]なる　秋
[illegible]　喜
[illegible]の歌　秋
[illegible]　喜
[illegible]　秋
[illegible]　喜
[illegible]　秋

祖翁

[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]　梨喜
[illegible]　省象
[illegible]　洟湖
[illegible]　希仏
[illegible]　我
[illegible]　喜
[illegible]　仏

投掌よ秋ひかるなりと　湖
けんなり　深き女仙のね　喜
さつさつと和の花さしこむ　亦
出ざる月　一尊　飛かふ　湖
百万年のころもの　心
隠居仲百の暇　亦
多細工なる有の流れ隔　喜
黄葉山ハ　ろい　寺なり　心
花さらり　ふ匂ひのそんん　湖
泳生ハ　旅そらして　喜

白酒ふ酔うと味を　亦
古芳郷の寝ハらい　湖
高机幣吹風のまくし　心
招きうさハ雄　亦
こ抱へふあまる梅　喜
梅の泳の丸う弦と　心
出地ふりふ男まさ女業　湖
心みーらき千話てり　喜
伽羅の多れのりも　亦
秋をとそのりふつむ　湖

晴ると降るの中を吟て　仏
雪もいとゝ帝一さらに里　素
話こんと帳の影のふかゝん哉　曲
いつの吸売きてくるのひらん　仏
きれる鞋指ひあつめてまつ　湖
放へさひるまのけしこう　曲
情るもいとくそ花の新市　素
風流ごゝろ一押うる春　湖

青柳の泥ふ志ろ汐干哉　紅翁
匂の風情をそへるさひつり　聖
東風白ふ床ルみをし掛けて　不角
硯きん水を杉てかゝ〳〵　墨雨
名月の光ハ新酒の深　曲
掬もこゝろ利ふりそ時代　雨
栗とそ歩行ふりそ時代　角
雅こゝろそ妹の丸髷　曲

折々の風ふくころく秋来ぬる
畜牲生弱 秋の山ころ〳〵 拳
調度さへいや高きの山ころ〳〵 去
楽ころ経をも若ひ労なるらん 丙
苦生ふ飲酒もあらハ五夕かと 拳
かのめくそくんなのまれいさ 去
志賀の老若あの〳〵みな角ひ立 丙
おのくのなきころよまるのさ法 拳
去

和箭

山路来て何やらゆかしすみれ草 芭蕉
をき苅しきの菅の 梨
老ぬまさを筵の寝ころ折迄 其
ふり袁さの女活のよいもり 素
追きさうふありて八かる月の雲 猶
沼つく田のなるふ塀際 素
猪先へ竹の冒ふ来て鳴いろ 猶
待せて垂たる徒居哉 素

おもふ事まめ女仕
疫て里愛あるき
所舎ハ義を
案氣のあるハ
吳ともりハ
雪の晴れを
名の志たる
石のふ社ハ
風折の松
只一つのよ

獨
妻
獨
獨
妻
獨
獨
妻
獨
妻

土屋の煙の焼
おもふ事ハ金
すゝりと筆
志ろねをハ
きつの月
入佛もすみ
俗名を
眉毛
仮ふ住
抹つのれ

仝
獨
妻
獨
獨
妻
獨
獨
妻
獨

澄江の名月秋の月なれや　素
柳ちらく　芭蕉の門　翁
蓬萊も野菜続てきぬまな　素
外の間のうらくいと二合半　翁
河原ひろくて大矢ひ　素
庵をたゝき地ハ京よりしるき　翁
花ふりもかゝハ何社自然石　素
昔ようもつゝきぬ蓬きり　翁

秋篇

手稲の雪やこけ入ぬ松の月　翁
月うつくしき秋の錦哉　素
あら尊の菜莊もかゝる時雨哉　翁
菜を抜卯ハ一ぱいのなり　素
一瀦も咲つゝきけり杜若　翁
雪よりくおりみそれ素　丈
小ぢよハ雨をうつくしき物陰て　坡
雨の思ひくとるうてい　素

稲妻の月のあ
人社訪ふ
陰打氣の徒を
残冬厳み
語ら一陰吟
燈育抽深
寸地の春心
盃や一本の芽

雪枝の雪ハ山と思ハるゝ　颯
暁所きれハ一寸前出る　春
又逢世なの年程ねふされ　颯
まゝ新らしき深雪の奥　春
古橋を呼ふる水梨る　颯
はもゝの花ふかゝる水梨る　春
海のよふ湊とて秋も残廻り　颯
新板橋も洲の橋干　春
名ハま低い山つゝ先へ咲　颯
さゝ舟ゝ面白き蛙　春

孤めるる系宝ふりも永く　仝
剔力ひとり行ゝ居眠る　颯
芭の飯系さへ雪ハ降むゝと　春
雪の雪とハいゝ名ゝ降　颯
火燵出くふりて深む夕雪　春
をんなのゝ風呂の口明　颯
寸程雪をいつのゝふったゝ冬ふ　春
玉乗も行ゝ鉢の新雪　颯
歩系ハ所の損るも新雪て　春
玉椿除ふとゝ鉄網　颯

紅すてゝ手鞠よも亦月の雲　素
堅のもりもよふ相の柱立　梨
笠着てめぐるひのんの六阿弥陀　素
かりそめふする狸ハいくつも　梨
本こふ焼茶よく煮て　素
かゝらくゝと吸ものゝ吉　梨
みとし一万菓子ハ売れん　素
歌つく猿ふりの面白　梨

祖翁

花咲て七日雨ふる藁屋哉　梨
八重ふ奏てく鶯の吉　梅宿
鳴清水の本当ら寺跡もまれや　素
きんちう笠の紐すてく　ある
衆と立とかつさ招ぬ月の比　素
麻雪着ハ唯つくりなり　素
新茶の延喜しらべ也　ある
とゝハ雪ちらいぬ房　素

名月の松てふなのう商量
聖四這ふ音のひまもつるゝ 若
秋寂と戸口ふひとつ角大汐 春
きてゐおろし一たまふれつゝ 若
かいまゝ松て筆ふの山亜名の通り 春
海川まてもつゞけてある橋 若
世ハ花ふなりて風流もいまきり 春
ゆけハ行あとさまふのまゝ 若

秋冨

名月や海もまた田の一みより
かれたりの月のうつる遠なるそら 挙春
まの戸ふもうつらもまゝ 秋湖
筆とるのもたゝしのうち 春
吹て来て神ふきゆるまの雪 芝桂
苞ひきのけし一株の杉枝 春
老来さふ迎さ坂を割り下げ 桂
明日の春をおくる 新夕 湖

よくこなれハ男仕立のちんなの子
鞍の革と極そくしめらせ
味噌汁ではりまぜ酢の強しと
売てもやそう学ぶ事
梨揉みやのり有けふ番の月
市へもちのき布引の滝
知識番茶薬罐のかゝられす
井のよい乃この諏中の地
うち名うく社へ乞の竪つき
ひこうねを山

車　桂　滝　車　桂　桂　滝　車　卒

一角してまる庵のさくと
案ぶよりまうそをつゝ喉箍
燈しだよあくうまき料理店
鉢干　極たる成の新生
笑くれともかく出仕乃石
智恵ふよの招武州
招独をそつと名揚ふ魚さゝて
いつりまい服　社下り
読も甘く強くりこへす土産
天井　あゝ楽嵐ふひつくり

仝　桂　滝　車　桂　滝　車　桂　滝　車

夕月も光をみのくさの入　桂
汐待て車一挺松　澂
人ふあ云つけるのも情を　喜
留主も百ふ切へさし　桂
積をえて中さのふこんや茶儀　澂
何ふ集る子供大勢　喜
日ふ本ふ尽ぬのもうの品なれや　桂
古池もうふ苗代水　澂

喜ふ多也ふ多ふ
野ふ先汐きくうのさひつり　梨喜
蓋とれハ本のせ牙ふのもる主語ふ　李荘
そう吟ふも　連次牙あり　保ふ
等ふ多ふ出てある月の澄切て　喜
秀ふ多ふなうハ老より萩　荘
二三すきしめて洞る細流一挑　喜
をんなをのりの飯石人　喜

莊　水
妻　雪
妻　の
莊　をする
桃　の
妻　金
莊　今
莊　波
妻　の
莊　の

桃　神
妻　ハ
莊　の
莊　何
妻　の
莊　の
妻　ハ
莊　ハ
桃　ハ
妻　ハ
莊　の
水　鳴

吟つきハすれ共月仍竹床ル　嘉
又沿連社　入て　来ル船　荘
ムてうりるの路地を拝ミ　桃
初ものらしきそハある　嘉
ますゝ繁る葉の狭ハ珍しや　荘
煙ものをへハ葉ハ涼しき事　ル
花心風流うるもあるて　嘉
ゆるむ流手一葉そゝく　嘉
　　荘

年ゝ花の望ミ有ゝ手鞠をきあつ
二三日ほゝとみれ青　重　梨嘉
瓶の蓋色ハ加減を試ミて　桃坮
よふらといへハゝゝとゝ　蓬宇
清ゝ有ふけつく用ある月の比
せきうちするゝ松風　嘉
揚ケ浜ハゝやゝ秋の入ちて　坮
茶碗一ぱい酒をハ文　宇
　　祖義　嘉

毎神子男まさりの姉むすめ　妹
情こゝろハ時よりまさりの　宇
葛ふぢ衣ハ着もの捺の衣かしく　妻
夕月すゝしく庸新の庭　妹
都きやう人ふの珍のきたそ　宇
かゝるふもなる賀の一畳　妻
瓊ぬぼこさゝらけてさゝのとゝ　妹
ひろ少日和よ市ふの仕合　宇
咲笑のうへ年をうそ気ぼし　妻
降るをあけて廣百あそら　妹

降るも誰ちよ〳〵ねをまちのし　宇
捺手鞠のかゝるい先　妹
もゝ百年表ちハ謡中りくと　妻
鞠ちよう〳〵　宇
あらうかゝみふ捺の葛　妹
少咲まて厂を焼ふへくおく　妻
年寿のまふ八中ふ国をゝ　宇
ちゝ吉小袖ハ意のぬけ在　妹
合歓の紫杜時りませそこ　妻
末のすゑまて清き洗ま　宇

月の高仕も猶新おかしこまり
夢ぬ夫のつまんとつくる虫　塒
知る人ぬ知るのあれや杜の寐　雲
たゞ杜恵まとへいる中ら　字
縁やらん茶囲のふも用学院　塒
味しめさへもあひにこある　雲
多抜森てゝ起そゝ死たのし　字
歌よみちらせ　塒　警　塒
雲

時雨舎
雲口莖莖事を
甲うまあり杉
松一木宮し杜
氏子の江戸の
旅人の名ぬ代やうつる　東京　貝風
思い出杜事の
そうちのうや二百年　飛驒の渡　空
そうちのうやはゝそ　越後亀石　空
その戸のうちこ雪の　下元　逸民　空
ゆしめせ初時雨　能登　陸海

三河 石巻

尾張 中庸

江口 九峰

伯作 掛淵

投志ふ 争

伊豆 三友

行徳 竹亜

拙子 杜

行徳 小仏

横須賀 貞狗

浜松 梅雪

玉川

梅屋

梨去

東京 素外

竹主

武蔵 寛義

尾張 衣洲

尾張　芝栖

越後　冤亭

下総　旭高

信濃　督糸

越後　帝心

越後　時雲

伊豆　遠多

伊勢　つう

ゝあの宮ま
詣ていたらねやせ
浦々のおこうや
接句なれ詠やゝ
接句そうりやれさ
ゝそゝや神主め
接句中筆そう
たゝそゝやう句の
接句そうゝれそう
等打やゝ句をゝ

十二ヶ月　秋多　秋冬　墨丈

接句　笠

伊豆　遠多

伊勢　つう

接句　時潮

接句　五桐

望郷のうれて
五山をつかう
笠接ていて
可時ひとう
時句やゝ句を
沖ゐてえて
陽炎うゝはく
おそやゝ句を
休ゐ詠ゝ
等打のゝれて

乙年

桐山

蓑笠も時雨のよ淀しる　雲峯
鉢扣のおもよそうやそうや時雨、李月
時雨やおもとまもりの夕炊き、犧仙
いそうそう延たやそうや時雨、歩甘
小一里の程もよかろ時雨こん、吐朗
春雨雫〳〵おをそさめる時雨、一光
新の朽〳〵漏るまで時雨、義川
川一つ先もりの無る時雨こん、平乎
時雨やとろりの酒の古桜　十二章　秀成
さ雨〳〵のきもとうする時雨　十二章　可用

赤松ろうそくの煙の寂寥と語りつん小松原、十三章　清石
語りゆく山ま高うる時雨、惣玄
ろ松も岩て尾上ハしぐれうん　半仙　板堂
初もまと第一ぞうる時雨　陸河　九成
本柏の枝を折ふる時雨、寸舟
時雨や蕎も苦むそう、巨川
ゆうまさ時雨のそう東山　佐中　穆堂
笠神のまそうそう初時雨、休時
如山の時雨もて来よ小蓑笠　伊豫　吉蝕

李廟舎

李廟ようやれをみ乃紅　梨雲
久まもや柱の本の白扇　三粒
撃帛まふふ扇のみ色ぶ　汪洲
李廟ふ扇ふ上山　加賀　拐営
石山の方作きつ見る扇うれ、蕎久
李廟扇や筆を砂乃上　を江浩高
よふ風の手除ようふ扇ぶ　星丈
あの杉ら峠と石ふ扇の郷　寸弁
夜九まて拐さをうの扇ぶ　九峰

李廟舎

李廟ようやれをみ乃紅　梨雲
久まもや柱の本の白扇　三粒
撃帛まふふ扇のみ色ぶ　汪洲
李廟ふ扇ふ上山　加賀　拐営
石山の方作きつ見る扇うれ、蕎久
李廟扇や筆を砂乃上　を江浩高
よふ風の手除ようふ扇ぶ　星丈
あの杉ら峠と石ふ扇の郷　寸弁
夜九まて拐さをうの扇ぶ　九峰

李廟舎

李廟ようやれをみ乃紅　梨雲
久まもや柱の本の白扇　三粒
撃帛まふふ扇のみ色ぶ　汪洲
李廟ふ扇ふ上山　加賀　拐営
石山の方作きつ見る扇うれ、蕎久
李廟扇や筆を砂乃上　を江浩高
よふ風の手除ようふ扇ぶ　星丈
あの杉ら峠と石ふ扇の郷　寸弁
夜九まて拐さをうの扇ぶ　九峰

雨るあとや礼者待る扇うん　梅屋
杉風をおそふく降る扇の影　遠民
雨つゝて夏ひえ初めし扇かな　一雪
人掬の扇て又もある涼しさ　碧雲
汗そゝや扇て風を一戦き　時湖
かさゝた秋風よ季のある扇かな　凍湖
風もまさ清きうや金　扇　伊豆　黒子
夕部の絵のおもかしき扇かな　喜枝女
清よ多のをさまりうねる扇かな　花の舎
夏さふの背中をそゝく扇かな　を子

きり帳をうるうちうさし扇かな　五楓
夏待の出るをいふ扇のれ　乙峯
あゝらしよ扇や風も秋うき　雪山
袴着よの形をや白　扇　楓山
夏ふをしをふ扇の柿そしめ　ぉ生
文法のかゝりもする扇の事　為成
笑うへりのりのうち柿る扇うん　可用
雪こもて秋立きふ扇うち　汨石
古を山をうつるふ扇かな　棋花
きるかる海うてつふ扇かな　此朗

ひらく春をまつ扇かな　懐仙

おこつて風をおこしき扇の那　雪月

沖の舟扇の風をうごきそり　雪坐

ふりまきをそめ扇やなの記念　一北

話をる扇のもとも水　李水

日さかりの木陰へ白き扇かな　義川

春やそもすゝし扇の半ひ初　三友

其あふく風を山しき扇かな　あう八

花供養

椽をゆるさふや花供養　三粒

古池や蛙とびこむ水の音　亀石

作くのゝ松のうら風　九峰

年ゝをそ新らしき供養かな　京　移竹

叫ぶ声や花の雲きこえ初　加賀　吾中

今ゝ昔一叫山をゆるき花供養、　望外

昔きや扇ゝうれる花の雲　素山

見やとの時恵ひ〳〵そ花供養　星丈

柿をてし花ぬ供養の一ツかな　梅屋

嵐山

供養せん花ゝ戸経陸のうゝて　掣雲

ゑひせぬ人の一ト本ぞ桜　東京　永機

天地や花を枕の詩一詠　山、紫香

花と寝よ人もうらやむ、雨水

うるんだる野の一面の花　全

山よりも人ぞうつくし夕桜、休叉

花ごもりなくてもよめる詠　素外

白波や汐干の跡の花ごもり　阪阿　肩泉

仁徳を皇の法製を感じて

此の蝶山のかなたや花ざかり　、寸舟

浮ぬ法会筆の上やう桜　岩代　恩山

花の為ぞれさうな時と笑ひ、城山　越後　稲住

ゆるさうな春の中くん〳〵うん　尾張　秋湖

花の山おもひのこうゐ哲学のさ

ぬの〳〵と吸ふやうに　阪阿　李荘

花の我れ花ぞ我れかも

ひそく陽の法しい花のかけ　夕

理をよむ事を時けき仕業、保外　越後　晴雲

まちをやうやうと散く虫の　父

うつゝ又夢の合連をおそうん　父

ゑう〳〵当る時しろ花ごもりの　松窗

ゐるの石と詠めるや梅の花　　楫雪
花と月うれかるすのあるもうれし　　牧志　雲雨
うぐひすをひとへ折りや初桜、、不争
花の雪ふくと引くと思ふうち　　越乃　松意
初花や二枠と折るよき　　伊豆三友
せんさくと詠むやをのの下風　　君子
花の雪の塵やきみの色　　紅　　将我
みちのくも花の村雲うらん花の村　　東京　眉山
芳ふきやをと古風を信ぶ振　　桃隅
うぐひすをまねてそよぐ初桜　　佐渡　對山

桜柳詠むれハ又きそうる　　駿河　浮水
うるをやきのの池の生一ツ　　古桜　雪蕉
降ますまち時うぐひすをまねて桜　　十二　香物
初花やふみ入ぬうち連ゐ
古ゐやいざハ桜のことふる　　桃城
うぐひすの引ずり出せハ深ふかし　　梁彩
降出せハ深ふかし大井川　　雪羽
鶯やをと尾のそよぐ初桜　　東京　青宝
二三日つゞきも花や嵐山　　蒲仙
うぐひすや梅つまぬ間のをと　　稲住

晴雲	
休亜	
石芝	
勇石	
位中 亜月	
桂雨	
逸民	
柳川	
小仙	

ふりゆきの又面白き宿　法橋英女
雪の上なりけり花や色の山　仙女
夕月の出やそめけん花の色　五桃
等甲斐又都へ二年ぶりにて上りける時
笠の緒のゆりむすぶ迄の桜かな　豊岡桃山
おかれ行名ごりをしき月
まくらおし匂ひのこりや初桜　雪半
附句事外に好きをつくしたる句の
よくうれはるる迄なる句の心　寥月
あらくうれはるる迄なる句の心　一屯
まま水　義川

旅人も立て寄るや夜の森　為成
行き暮るる雲こそ秋を知りながら　可用
影もなくなれゆきまつ虫の声　清石
露のみのきらめきそふる　墻仙
散りそめや揺るる萩の下葉より　なな
初時雨してもる月の影　叶朗
なんのうとあの明ぼのうるさくも　哲玄
志れてふたり如月の小経卅　重山
筆の枝動かぬそらの風　三祐
おとなしく社うつせる雪のうち　雪枝

金魚鉢の湯もすこし冷の玉
吸ものの日を辛崎の夕ぶり　白砂
ふるれば春の月淡む桜うん　文里
春雨にきらる風もうらうら　去義
なみ紗やうるきうら　三里
咲出る春や風ふかるる　京蕾
御ようう春や鶯の舌　壺中
金の春ふかき風うる雨　越後 絡杜
たつうりとあおく雨桜うん　紫山
桜うん人中ふる雪花　武蔵 豊山

住ふねもうき峰や山きそふ　　雪山
雪と浮て経ふるしら波の夜
明ぼのゝうらうらしき春の
哥ゝも哀をおもよ掛うん　　一葉
雨の夜ふる事ある人のかず　　仝
野ごゑ夜ふる人の上　　雅秋
春ふる又夜ふんのひとつかず　　越後抱月
行ふる秋て連たちをそふ　　孝山　楓童
芝露も拾ふ　　尾張　二乃
爰つゝんやこゝの玉伊勢　　仝

世の中もひろふな夢　　時湖
つゝくとそふるそをきる春の枝　　活高
夜の雪ふる事ある人のかず　　九峰
まつ夜や月白ひかりつゝやこの　　仝
侍きつゝ侍きつゝの玉伴書　　秋湖
誘れてさそふ友ある夜をぶ　　尾張　楓山
侍へまゝよき枝ふりの夜をふる、　　月高
年ふる　ふるまつゝや玉の幹、　　華阿
嬉や玉ふ野ふるまつの夢、　　文嶺
野ふるや玉ふ和ふるあの書、　　旦乃

荒株の岡と成るまで二百年　秋湖

植ゑよき中路の春うれ　仝

をゝ峰又こゝてそつゝ成る　尾張　楓山

かそへ来る春もあやめの風　仝

一すじにさゝやく雨の初しぐれ　月高

降ありて幸のあるこそ春ゝ　仝

神ながれて人の事なり村祭る　華阿

登意ある春をつゝまぬ文巌

登る山又て来る春　仝

つゝしんで祭る祖を春ゝ　尾張　尾松

祭る命やのそつゝて等る旅人　越後　柳塘

きそうゝ杉のこゝろ清るけふ　仝

まをつゝて池のきく時るれ　尾張　凌秋

新そゝぐ手水の雫つゝまる　仝

古池や蛙飛こむ水の音　肩泉

古池と降る音ゝき時るうる　京　九亟

古池や降る音ゝき時るうる　松窓

そ年とそ匂ひ初める　不争

降る雪の米まもるうゝ時るれ　本間

人きらぬ雨の名 信中子年
[illegible]
[illegible]
[illegible]

梅の緑ゝ雪つもる神ゝ　加賀　梅渓
ゝゝをきゝみるゝ人ある峰ゝ　ゝ
新ゝおもゝそゝる波の秋のくれ　二乃
ゝゝきあゝゝ雪ゝ旬ゝ等の花　ゝ
潮ゝや　尾張　ゝの夕霰き　尾張　ゝ
ゝゝゝゝ夜のゝゝの山ゝれゝる　松ゞ　蓼太
漁火や雪ハみぞれの　海　尾張　芝楓
静ゝや往来途絶ゝゝ毋扱、　旦ゝ
涼ゝゝさを伴ゝゝ　ゝゝ　ゝ、　雪軒
ふり風ゝゝて松ゝゝゝゝ　ゝ

松の雨柳の門や傾傾波　尾張　雲州
松風の雪ハ花ゝゝれゝ　ゝ
等閑ゝゝ結ゝゝゝ、　乾松

双林寺

行雲やまゝ汐ゝゝゝ石の上　東玉軒
松ゝや歩松ゝのゝゝ　ゝ
暁ゝ雪の山ゝゝ　月作　峰風
雪ハ暁のゝゝへ　ゝ
朝ゝゝ汐ゝ跡ゝ帆、　月彩
松ゝゝへ雪ゝ　ゝ

湖上

こゝも名ぞ琵琶の湖水のむかしの秋

おもかげや舟の湖水の中もつる秋の風　乙瓢

湖水のそこもつる秋の月　全

あるものと思ふやくもる月おぼろ　三友

憐一つ雨やふかまるつゆの夕

秋深山

雲深き峰の松やおもの変　梅盃

雨の夜の秋ふかまるつゆ

暮るほどの光も秋のうつるつゆ　全

中秋名月

来ぬ人を松もつらしや月の雨　主風

秋風や種の梅を世一雫ふる　全

賀茂

あるも秋の深きも賀茂の社哉　京風羽

出る月も舞のそらなり東山　扇山

名月や出るも賀茂の社の上　京玄

出ぬ月のうしやの川や天の川　居中

名月やそもそも招れぬ客もあり　全

雲のゆくへも秋の月　哭角

河こえて空の雲ゐの川　　隆阿雲番
ふるさと籬遠移のふるうな　　俤仙桃洞
蓑笠の里こえそうな夕月の雨　　仙阿
咲いても散の身も秋の色　　仝
蘭公卿のあしらひ咲並ぶ　　越佐和歌
宇治川やなぎくさくもふりつくる風のいと　　仝
ふるさとうつす世の夢の色　　伯耆桜雲
鈴虫こそ安堵しやすらん移延　　を江本阿
粧ひも又一しほや綾山　　李庄

さくら咲く春風ぬるや夢の梅　　松埜
雨こゝろ春のあるうち物の意　　仝
和歌や浪てふ人遊り　　越佐三階
浮雲て春てふ小田の水　　越中桃五
久方の時て月おそ里ふり　　越佐友丸
咲いぬをさそりかひあり笠の色　　尾張荷庵
山雀や声を呼れハよい中葵　　九峰
短夜や浅ちく里や秋の和　　仝
石田つゝて出るやきりぐす　　越佐文笛
短夜の枝さくら笠ふる　　仝

みそさゝ白てふ茶一筅の
日のすゝける梅やあるじもなき　一学
　　梅屋
　　を帰樵
さゞ波ハリ枝嵐之秋のうミ　三粒
移香や移の香ゟ移りけり　駿河　九成
乙女子の捨ゟ捨ゟ秋の空　空
萩の戸や白ル釘ゟ吊ゟる　梅塚
七種やさゝ〻ぐ釜ゟ女釜　移任
栞ゟる枝ゟ折ゟ折ゟ折ゟ折ゟ　永洲
勢ゟる中一流ゟ入ゟ入ゟ入ゟ　尾張　羽洲

もき取ゟ春のあけぼの
本筱のまゟゟゟゟゟゟ　甲斐　雪杜
灯をゟゟゟゟ初ゟゟゟ　豊佐　雪一
まゟゟや時ゟのもゟゟ　越佐　流芳
雫ゟ毎ゟゟゟゟゟゟ　阿波　遠舟
梢のさゟゟゟゟゟゟ　巨川
一日や何ゟゟゟゟゟゟ　越中　山林
ゟ和ゟゟゟゟゟゟゟ　乙甄
拠ゟや三ゟゟゟゟゟ　越佐　松壺
名月や窓ゟゟゟゟゟ　半佐　華迹

客ゆく舟や　あの夕日　新　素相伝

起ふしも　カそく　一雲の外　立

考ふるよ　あの松や　筒のきく　仙奎宮一

海を出て　断くきしむ　初日　立

起て出る　島の　くろき　柳　一九　加賀　甫立

うつくしき　猿ども　移の月　一九　讃岐　素海

猪持の　ふるき　秋の　気　松洛

松風の　波の　果や　てらの　川　洛北　芳雪

そしまき　うらの一夜や　幸志　、支仙

客ふまち　ま入　波ぢ　梅の　花　、無肋

ふ後を　おそつきや　梅の　花　、　学笠

川人の　待うち出る　蛙一ツ　陵祢　結女

一夜の　夢よ　のそる　やけ　る　、　洛秋

結ぬ　の月ゟ　吐しさ　と　ぢうち　、　孤帆

掃しさハ　吐人　ま　ち　、　主海

よ　ま　ち　ひ　ら　ん　ま　ち　や　俗　景　の　秋　松雯

やう〳〵　一　切　越　て　む　め　の　花　越佑　木甫

客や　風の　ま　り〳〵　小　笹　、　なお玉女

行ふそれ　柳一本の　〳〵　き　ふ　、　柳泉

新　築　や　客の　移　を　祭　て　ゟ　く　、　幸旌

斗馬うて出るの柳　越佑　孟子
幹々へて咲々り枝の
萩蓬萊の浦先ゆそ〳〵
々のとく〳〵やうるる
大雪や思ひ〳〵せハち花の
笠野の帆やや不二の麓まで　　抱月
麦畑のうまぬかれぬき柳うる　　総拙
こゝれ々う委々う萩の花と雫　　出代牡山
笠時〳〵拵る事よまうやうの月　　羽佑　風泉
新居やさ〳〵乞出来〳〵佐　　越佑　雪渓
、徐風

為ことき山を拵そうて雪の峰　　佐佑　為秋
月後や等の中打〳〵多の雪　　仝
消雪の速瀧升て多仙花　　桃溪
山畑や雪山まことの夕〳〵新
雨漏舗のさまうて萩の花　　拓堂
琴柿の風や高〳〵き神う庫　　和郭
夕汐や擂鉢を埋〳〵月一ツ　　雪晩
新芭やかうそハ子る素山　　西川
又自雨の後を時う〳〵つ〳〵　　越佑　九儀
雪雫う岩を流うまうる　　仝

祖翁二百年祭の下流　眉山

芳躅を汲やお墓の下涼み　立

雪洗ぐ一しきりや初時雨　千年

時雨傘やはんてうる杖と笠　挙去

輪寺の庭を掃うそうれん　立

約束の俥を待つそうれんな　立

初冬やまるく移築の沈田町　立

祖翁忌を長谷尚の日本海で　

洗ひつる形見の月やナニヶ月　玉

東京北川図書館蔵書

京都東本願寺圖書印
一道居北川梨春

祖翁二百年忌

黄鳥を法や初音の下涼　眉山

雫活堂之一　〃

時雨会や炉ん〳〵と扶上豆　千年

蟬声の森を当るうん　梨春

終中の俤を残しそろ時雨　〃

初雪やまろく移かの沈田町　〃

祖翁五十回忌

〃

延ふも綾る七夕や

小石川

ちと温泉の気まぐれ

星の松

青柳や灯籠まつある

細代小屋

太妙境吟社

梨春